

虹の素 雨上がりには好きだといって Vol.2 (4月編)

## 「アインブラットの本」

桜木想香

それは、君に伝えたいたったひとつの言葉を探す旅

### CAST

- ♀ 関口 二葉 ……2年A組。図書委員長。姉の一葉を亡くしている。実家は書店。  
♂ 結城 玲央 ……2年B組。サッカー部。美鈴を好きになる。  
♂ 井上 治 ……2年C組。副委員長。新美先生が好き。  
♀ 篠原 紫 ……2年D組。美術部。いつも音楽を聴いている。  
♀ 土屋 美鈴 ……2年E組。二葉の書店で働いている。賢治が好き。  
♂ 皆川 賢治 ……2年F組。紫が好き。  
♂ 結城 龍之介 ……教育実習生。高校時代に、一葉と付き合っていた。  
♀ 瀬川 新美<sup>しんみ</sup> ……2年B組担任。司書資格もあり、図書委員会の顧問も務める。  
♂ 関口 隆介 ……二葉の父。書店を営んでいる。  
♀ 仙波 千帆 ……大学1年生。元横南高校サッカー部のマネージャー。

神奈川県立横南高校。横浜市内の丘の上にある。  
来年度より、県立浜北高校と合併し新設校になるため、最後の1年である。  
「雨上がりには好きだといって」シリーズは、時代を2013年に設定しています。  
が、実際の史実・時代状況とは違う箇所もあります。



## 「OPENING」

4月1日。駅前の商店街から少し離れた所にある小さな書店の月曜日の午後。外は突然降りだした雨の音でにぎわっている。お客さんは誰もいない。高校生くらいの店員の女の子が2人、カウンターで暇を持て余している。

美鈴 暇だねえ。

二葉 うん、暇だ。

美鈴 お客さん、来ないね。

二葉 来ないね。

美鈴 雨、すごいね。

二葉 いきなり降ってきたよね。

美鈴 暇だねえ。

二葉 うん、暇だ。

美鈴 私ね、賢治と付き合うことになった。

二葉 え！？

二葉 おめでどう！

美鈴 嘘だよ。

二葉 え？

美鈴 今日はなんの日？

二葉 うっわ、騙された。

美鈴 そんなことできるわけないじゃん。

二葉 あ、そう。

美鈴 あ。

美鈴、店の外になにかを見つけ、奥にいきビニル傘を一本持ってくる。

二葉 どうしたの。

美鈴 あの女の人、傘持っていないみたい。

二葉 ほんとだ。あまやどりかな。

美鈴 一本くらいあげてもいいよね。

二葉 全然いいよ。捨てるのにもお金かかるし、あげちゃえ。

美鈴、傘を持ってお店の外に出て行く。

二葉、日付でふと気づき、店の奥の父親を呼ぶ。

二葉 お父さーん。

店の奥から隆介が出てくる。

隆介 ん、どうした。

二葉 お父さん、明日。

隆介 明日？

二葉 お姉ちゃんのこと！

隆介 ああ、そうか。明日か。

二葉 いくよね。

隆介 ああ、そうだな。行こうな。

陰っていく。

4月12日金曜日。新年度明けの図書室。先生と生徒6人がいる。

さて、それでは、今年度の図書委員会。第1回目の委員会をはじめます！まずは出席から。えーとA組、関口二葉！

はい！

でB組がこいつ。

こいつってなんだよちゃんと呼んでくださいーい。

結城玲央！

……。

呼んだんだから返事してくださいーい。

はーい。

C組、いの

はい！

井上治。D組、篠原紫。

はい。

E組、土屋美鈴。

はい。

F組、皆川賢治。

はい。

そして担当が瀬川新美です。よろしくおねがいします。じゃあ早速、委員長を決めるけど、誰かいますか？

はい、私やります。

えっ！

あ、関口さん。本当。

そしたら俺、副委員長やります！

あら、治くんも。ありがとう。他にいなければ。

異議なし。

なら、2人、よろしく。それじゃあ次。みなさん御存知の通り、うちの高校は、図書室の利用率がとても低いです。あなた達図書委員には、生徒達に読書の習慣を植え付け、この寂れた図書室を活気のあるものにするようやっていってもらいます。

はあ？なんだよそれ。

皆に読書の楽しさを知ってもらうこと。そのためにはまず、あなた達が本を読む楽しさを知ること。今日1冊持って帰って、来週までに読んでくること。いいですね。それじゃ、今日は以上です。解散。

お疲れ様でした。

こら、帰るな。

俺読む時間ないもん！

雨上がりには好きだといって Vol.2 「アインブラットの本」

新美  
玲央

じゃあすぐ読める本を先生が選んであげる。  
だからいいって！

新美に連れられ、本棚の方へいく玲央。

賢治

まじかよー。

紫

どうしたの。

賢治

俺、本読むの苦手なんだよー。読むとすぐ眠くなってる。

紫

ああ、それはわかるかも。

賢治

今のうちに帰っちゃおうかな。

紫

でも、先生。

賢治

いいっていい。なあ治。

治

先生、俺にも何かおすすめの本教えてください。

賢治

あら。

紫

先生、私にも。

賢治

ちよつとー。

治と紫、行ってしまう。

賢治

まじかよー。

美鈴

大丈夫？

賢治

土屋あ。俺嫌われたかな。どうしよー。

美鈴

そんな落ち込むことないって。一緒に本選んでおいでよ。

賢治

でも……。

紫

賢治くん。

賢治

はい。

紫

先生が、最初だからみんなに課題図書決めてくれるって。いこう。

賢治

あ、うん！行く！

戻ってきた紫と一緒に、賢治も行く。

二葉

いいんだか悪いんだか。

美鈴

いいよ。

二葉

そう？

美鈴

うん、いい。

二葉

そう。ならいいけど。

美鈴

私達もなにか選ぼうか。

二葉

私はもう決めてるから。

美鈴

はや。

二葉

美鈴が来る前に。

美鈴

じゃあ私も選んでくるわ。

二葉 うん、いっておいで。

美鈴、後を追って本棚へ。

二葉の家。二葉が本を読んでいると、父がビールをもって来る。

隆介 また本読んでいるのか。二葉は本当に本が好きだなあ。一葉にそっくりだ。  
二葉 ご飯たべる？

隆介 いや、自分でやるからいいよ。読んでて。

隆介、ビールをとりについてあけて飲みます。

二葉 あのね。

隆介 ん。

二葉 私、今日、お姉ちゃんにあつたよ。

隆介 え。

隆介 お前、見えるのか。

二葉 見えないよ。

隆介 そうか。

二葉 これ。

二葉、本を差し出す。

隆介 ん。

二葉 図書室で見つけた。

隆介 これが。

二葉 貸し出し名簿。

隆介が裏表紙を開くと、そこには2人になじみのある名前が記されていた。

隆介 ああ。

二葉 それ見つけたとき、お姉ちゃんが見えた。

隆介 やっぱり見えたのか。

二葉 いやそういうのとは違って。その本を読んでもお姉ちゃんの姿が浮かんだ。

隆介 そうか。

隆介 一葉、図書室の本をしょつちゅう借りて来てたなあ。本なんかうちにいっぱいあるんだからそれを読めばいいじゃないかって言ったら、「あの本は売り物でしょ」って怒られたっけな。

二葉 私、他にもお姉ちゃんを探す。

隆介

そうか。

二葉 隆介

でもな。お前はお前だからな。  
わかってるよ。ありがとう。

陰っていく。

「2」

15日月曜日。委員会の皆が集まっている。

新美 それじゃ、今週の委員会をはじめます。今日は当番を決めます。当番は月曜日  
から土曜日まで。一日2人ずつ。面倒くさいから、クラス順に順番でいいわね。  
どういうことですか。

新美 つまり、月 (AB) 火 (BC) 水 (CD) 木 (DE) 金 (EF) 土 (FA)

呼ばれた通りに手を挙げていく。

新美 これでいいわね？

玲央 2人もいらないだろ。一人でよろしく。

新美 ちゃんとやらなかったら、単位あげないからね。

玲央 おいそれずるいだろ。

賢治 なあ土屋。

美鈴 なに。

賢治 あのさ、曜日代わってくれない？

美鈴 え。

玲央 お前ずるいぞ！

賢治 俺土曜日バイトだからさ、できれば代わってほしい。な。

美鈴 ああ……。いいよ。

二葉 え、美鈴。

賢治 やった、ありがとう。助かる！

二葉 美鈴ダメだよそれじゃ、私たち2人土曜日になったらお店困る。

美鈴 そしたら……井上くん、代わってくれる？

治 俺？

二葉 そうじゃなくて。それなら私が代わるよ。篠原さん、代わって。

紫 私？

賢治 え、マジ？

紫 私はいいけど。

賢治 ちよ、ちよと待ってよ。

美鈴 待って。私、できたら火水がいいんだ。ダメかな。

治 先生、土曜日って、先生もきますか。

新美 まあ、一応来ますよ。

治 そうですか。いいよ、俺、土曜日でも。

美鈴 ありがとう。

紫 私たちも代わる？

二葉 いや、それなら代わらなくても大丈夫。ごめんね。

新美 それじゃ、これでいい？なら早速、明日から当番の人はお願いね。それじゃ、



雨上がりには好きだといって Vol.2 「アインブラットの本」

玲央  
新美  
玲央

今日は以上です。解散。  
お疲れ様でしたー！  
する前に今週の本を選んでいってね。  
あーもう！

16日火曜日。美鈴がいる。玲央、入ってくる。

玲央

わかってるよちゃんとやるから来んなよ！

美鈴

あれ。

玲央

なんだよ。

美鈴

来たんだ。来ないと思った。

玲央

ばつちり新美につかまったよ。

美鈴

あんた、サッカー部なんですよ。

玲央

そうだけど。なんで。

美鈴

クラスの男子がいつてた。高部が。すごいまいんですよ。

玲央

別に、そんなことないけど。

美鈴

サッカー部強いんだよね。去年も県大会準優勝だったんですよ。

玲央

ああ。だから今年は、絶対選手権いくんだ。

美鈴

ふーん。

玲央

なんだよ、その興味ない反応。

美鈴

いや、いいよ、部活いつてきて。

玲央

え。

美鈴

練習しなきゃですよ。

玲央

でも。

美鈴

いいよ。先生には私がちゃんといっておくから。

玲央

いや、いいよ。ここにいます。

美鈴

平気なの？

玲央

遅れた分は、自分で取り返すから。

美鈴

そう。

玲央

ありがとな。

美鈴

いいえ。

17日水曜日。美鈴と紫。音楽を聞いている紫。

美鈴

誰も来ないね。

紫

なに？

美鈴

誰も来ないね。

紫

そうだね。

美鈴

ねえ、何聞いているの？

紫

土屋さん知らないと思うよ。

美鈴

なに。

紫  
美鈴  
（イヤホンを美鈴に渡す）  
あ、え、落語？  
紫  
うん、そう。  
美鈴  
へーえ。  
紫  
最初から聞く？  
美鈴  
うん、聞きたい。

18日木曜日。雨。紫と賢治。音楽を聞いている紫。

賢治  
あの、篠原さん。  
紫  
……。  
賢治  
篠原さん？  
紫  
ん、呼んだ？  
賢治  
いや、あの。いい天気だね。  
紫  
雨降ってるけど……。  
賢治  
あ。うん、そうだね……。  
紫  
いいね。雨でもいい天気って思えるって。  
賢治  
本当に。  
紫  
本当に。  
賢治  
そっか。

19日金曜日。賢治と治。

賢治  
あーもダメだ全然話せないよー！  
治  
どうしたの。  
賢治  
だって、ずっと音楽聞いているんだもん。  
治  
別にいいじゃん。話さなくても。  
賢治  
でもだっつけつかく2人でいるのに！  
治  
いつもこんなにしゃべってるのに。  
賢治  
そうなんだけど、篠原さんの前だと、頭真っ白になっちゃって。  
治  
あーはいはい。  
賢治  
なあ、どうしたらいいかな。  
治  
知らねーよ。

20日土曜日。治と二葉と、ときどき新美。

本を読んでいる治。別のテーブルで仕事をしている新美。  
本を探している二葉。裏表紙の貸し出しカードを見ては、本棚に戻す。  
新美がふと顔をあげると、治もちょうど同じタイミングで顔を上げる。  
目が合い、微笑む新美。照れながら笑い返す治。  
貸し出しカードに姉の名前を見つける二葉。

二葉  
2人

あ！  
？  
あ、いや。なんでもないです。

21 日曜日。玲央の家。玲央が読書をしている。龍之介が帰ってくる。

龍之介

ただいまー。

玲央

おかえり。試合どうだった？

龍之介

負けたー。

玲央

相手神戸だっけ。

龍之介

そう。土壇場で決められてさー。

玲央

ドンマイ。

龍之介

ったく。この忙しいときに時間つくって行ったんだから勝って元気くれよな。

玲央

忙しいの？GW あけでしょ、教育実習。

龍之介

もう今から色々準備しとかなきゃなの。

玲央

あそう。

龍之介

お前はどうしたの。

玲央

何が？

玲央の呼んでいる本を取り上げる龍之介。

龍之介

本読むなんて珍しいじゃん。どういう心境の変化？

玲央

これはちげーよ。ただ、図書委員やらされてるから。

龍之介

やらされてるで素直にやるようなやつだったっけ？お前。

玲央

仕方ないだろ。やらないと後が面倒なんだよ。

龍之介

ふーん。なんだ。てつきり好きな子でもできたのかと。

玲央

ばっ！そんなんじやねーよ！

龍之介

ホントわかりやすいな、お前。

玲央

うるせー……。

龍之介

なあ、どんな子？かわいい？誰似？

玲央

ヤメロ！

龍之介

あーはいはい。ま、できたらその子の好きな本聞いて読めよ。

玲央

え、なんで。

龍之介

本ていうのは思想だ。小説には作者の思想が描かれている。その人の好きな本を読むことは、その人の思想、つまり価値観を読むことになる。

龍之介、ばらばらとめくった本の背表紙の貸し出しカードに目がいく。

龍之介

あ。

玲央

ん？どうしたの？

龍之介

いや、なんでもない。

陰っていく。

(22 日月曜日)

新美  
玲央それじゃ、今日は以上です。解散。  
お疲れ様でしたー！

おおきなあくびをする玲央。本棚をあさる二葉。

教科書を閉じたら あくびを脱ぎ捨てて  
いつものあの場所で 君をさがしてる

(23 日火曜日) 笑顔で挨拶をする美鈴に、少し頬を赤らめる玲央。

目と目が合うたびに 胸がトクンとなる  
不思議なこの気持ち たぶん恋だろう

(24 日水曜日) 〇を持ってきて美鈴に貸す紫。

大好きな曲 教えてほしい  
君のこともっと知りたい

(25 日木曜日) 賢治は紫を伺ったまま、何もしゃべれず夕焼けを眺めている。

大好きなのに 話せないまま  
同じ夕焼け空見てる

(26 日金曜日) 賢治の話聞かされる治。面倒な奴。

どうしたらいいの  
わからないけど  
今とつても 幸せなんだよ

(27 日土曜日) 目と目で会話する治と新美。

言葉がなくても 伝わるのかな  
君といると 幸せなんだよ

(28 日日曜日) それぞれが本を読み、悩み、考えている。

どうしたらいいの  
わからないけど  
このときめき わかってほしいよ

(88 日月曜日) 委員会、意見を出し合っている。

言葉にしなくちゃ 伝わらないね  
このときめき 君に届け

図書新聞や本の PC を作るように決まる。委員会は解散する。

89 日火曜日。玲央と美鈴は一先ず貸し出しカウンターに。

玲央  
美鈴

なあ。お前、賢治のこと好きなの。  
え!?

玲央  
美鈴

なんで……私、誰にも……。  
見てりゃわかるじゃん。

玲央

話しかけないの?

美鈴

いいの。

玲央

なんで。

美鈴

察しがいいなら気付いてるんでしょ。

玲央

ああ、まあね。

玲央  
美鈴

じゃあさ、なんであいつと当番かわったの?  
え?

玲央  
美鈴

なんでわざわざ、篠原と賢治と一緒に当番になるようにしたんだよ。  
だって、賢治が喜ぶから。

玲央

は?

美鈴

代わってあげたら、賢治喜ぶじゃん。だから代わった。

玲央

それでいいの?

美鈴

いいの。

玲央

話したいって思わないの?

美鈴

思うけど。

玲央

わっかんねーな。普通応援なんかできねーだろ。

美鈴

うーん。

玲央

じゃあさ、なんでそのあと、わざわざ賢治と離れて篠原とくつついたの?

美鈴

篠原さんと話してみるのもありかなと思って。

玲央

なんで。

賢治の好きな人ってどういう人なんだろうって。知りたかったからかな。それで、私も好きになれたらいいのかなって思ってた。

玲央 ちよつと待てよ。ライバルだろ。ライバル好きになつてどうするんだよ。  
美鈴 でもさ、好きな人が好きな本だったら、読んでみたいって思うじゃん？それと  
同じじゃない？好きな人の好きな本を読むことと、好きな人の好きな人と仲良  
くすることは同じだと思うけど。  
玲央 ああ、確かに……。

賢治が本を持って入ってくる。

美鈴 あれ、賢治どうしたの？

賢治 いや、先週借りた本持つてくるの忘れてて、返しに来た。

美鈴 そっか。

玲央 何読んだの？

賢治 え、ああ。「源氏物語」

玲央 おもしろかった？

賢治 おもしろかったよ。

玲央 どんな話？どんなところが面白かった？

賢治 うーんと、主人公の光源氏が超イケメンで、ローラースケートはいて歌って踊

つて、パラダイスな銀河を目指す話だよ。

美鈴 あ、それおもしろそう。

賢治 あー読む？

美鈴 うん、ありがとう。

賢治 土屋は何読んでるの？

美鈴 私は今は「植物図鑑」(有川浩の)

玲央 ちなみに俺も「植物図鑑」(図鑑)

賢治 あ、それ映画化したやつだろ？

美鈴 そう。読んでから見ようと思つて。

賢治 いいね。じゃあそつちも読み終わつたら次読もうかな。

美鈴 いいよ。

賢治 さんきゅ。あ、じゃあそろそろ帰る！じゃね。

賢治、出て行く。

美鈴 ありがとうね。

玲央 ん？

美鈴 きっかけ、くれて。

玲央 おう。

美鈴 いいよね、なんか。好きなもの貸し借りするつて。

玲央 おう。

玲央 本ていうのは思想だ。小説には作者の思想が描かれてる。その人の好きな本を  
読むつてことは、その人の思想、つまり価値観を読むことになる。

二葉が戻ってきて、ちょうど耳にする。

二葉

え。

美鈴

あ、二葉、どうしたの？

二葉

いや、なんでも。本、探そうかなって思ってた。

美鈴

そうなんだ。

二葉

でも、今日はやっぱりいいや。じゃあね。

二葉、

出て行く。

美鈴

じゃあね……？

5月1日水曜日。美鈴と紫。POPを書いている2人。

紫

できた。

美鈴

え！？

美鈴

うまつ！すごい。超上手！

紫

そう？ありがとう。美鈴もうまいじゃん。

美鈴

ゆっかの方がうまいよ。えーすごい。

紫

でも、こんなんで本当に興味ひくかなあ。

美鈴

ひくひく！POPって意外と効果あるんだよね。お店でもさ、いいのが書けると、その本売れるもん。

紫

そうなんだ。

美鈴

でもさ、ゆっかミステリーばかりだけど。他のジャンル読まないの？

紫

んーまあ読むけど、恋愛ものは無理。

美鈴

そうなの？

紫

そういうのって幻想じゃん？実際にはありえないこととか書かれてたりするのに、憧れとか抱いちやう人もいるじゃん。私は幻想に憧れたくないし、それで現実には幻滅したくもないし、目の前にいる人だけを見て、恋愛したいなって。好きな人、いるの？

美鈴

ん？別に。

紫

そうなんだ。

美鈴

でも、面白いなあって思う人はいるよ？

紫

え、そうなの！？誰？

美鈴

2日木曜日。紫と賢治。

賢治

うまつ！すごい。超上手！



紫 そう？ありがとう。  
賢治 俺説明下手だからちゃんと伝わったか不安だったけどイメージにピッタリだよ。篠原さん天才だな。

紫 褒め過ぎだよ賢治くん。

賢治 いやそんなことないって。篠原すげーよ。頭いいし絵もうまいし、キレイだし、ピアノも弾けるよね確か。それから料理も得意そうだし、子供にも好かれそうだし、あ俺も子供は好きだから、いずれは子供は欲しいなって思ってるんだけど……。

紫 賢治くん、もう、ホントそんな。いいから。

賢治 え、あ。俺は思ったことを言っただけだから。

紫 ううん、ありがとう。あんまり、褒められるの慣れてなくて……。

賢治 そっか。

紫 キレイだなんて初めて言われたよ。

賢治 ほ、ほんとに？

紫 うん。

賢治 き、キレイだと、思いますよ。篠原さん、は。

紫 ふふ。

賢治 なに？

紫 いや。賢治くんホントおもしろいなって。

賢治 ホントに！？

紫 え、う、うん。

賢治、浮かれるあまり一人舞い上がる。その様子を怪訝そうに眺める紫。  
3日金曜日。GW 初日。賢治と治。

賢治 キタ！マジでキター！

治 いや、そっちは南だぞ。

賢治 そうじゃなくて。キタんだよ。

治 なにが来たんだよ。

賢治 あのな、篠原さんが、俺のことおもしろいって。

治 おう、やったじゃん。

賢治 そうなんだよやったんだよキタんだよー！

治 それで？

賢治 え？

治 それで。

賢治 それでって。

治 え、それだけ？

賢治 それだけだけ？

治 うそだろ？

賢治 うそじゃないけど？

治 おめでたいやつだな。

4日土曜日。治と二葉。妙に空気が重い。

二葉 あのさ。

治 なに。

二葉 いや、なんか。怒ってるの？

治 ああ。全然。

二葉 え。

治 俺よく言われるから。怒ってるのって。

二葉 そうなんだ。

治 でも普通だから。気にしないで。

二葉 ううん平気。

治 今日、新美先生こないのかな。

二葉 なんかあるの？

治 えっ。いや。なにもないけど。

二葉 来ないっていつてたよ。というかGWだしうちらも休みでいいじゃんね。ど

治 ーせ誰も来ないんだし。

二葉 帰ろっか。

治 え、帰っちゃうの？

二葉 帰っちゃおうよ！

二葉 帰っちゃおうか！

2人、帰り支度をして帰ってしまう。

5日日曜日。本屋に向かう美鈴とすれ違う玲央。

美鈴 あ。

玲央 おう。

美鈴 部活？

玲央 おう。これから試合。

美鈴 へーえ。大会？

玲央 おう。今日から。

美鈴 そうなんだ。がんばってね。

玲央 おう。お前はどこいくの。

美鈴 私は二葉の本屋。

玲央 おう。そっか。おまえも頑張れよ。

美鈴 ありがとう。じゃ、いくね。

駆けていく美鈴の背中を追いかける玲央。

玲央

おう。ラッキー。

6日月曜日。二葉の家。二葉本を読んでいる。父が来る。

隆介

また読んでるのか。

二葉

うん。

隆介

別にいいんだからな。お前は……。

二葉

そんなんじゃないよ。

隆介

おう、そうか。

二葉

わかってるから。私は私だもん。

隆介

ああ。

二葉

あのね、委員にね。なんかちよつとこわい感じの人がいて。

隆介

おう。

二葉

でも、一昨日話してみたの。怒ってるのって。そしたら、怒ってないよって。

隆介

私ずっと怒ってるのかと思って、こわいっていったの。そしたら、全然そんな

隆介

つもりないからって。

二葉

そうか。

隆介

お姉ちゃんだったらさ、もつと早く、普通に話しかけて打ち解けちゃうんだろ

隆介

うな。だからちよつと悔しいけど、話しかけられた自分は褒めてあげたい。

隆介

そうだな。

隆介

そういう風になりたいものになろうとする姿勢。一葉にそっくりだよ。

陰っていく。

7日火曜日。玲央と美鈴。扉が開き、新美先生と龍之介が入ってくる。

龍之介 わー変わってない。相変わらずぼろいなー。

玲央 龍兄！

美鈴 龍兄？

龍之介 お前本当に図書委員やってんだな！でもここでは先生って呼べよ。

美鈴 お兄ちゃん？

玲央 うち来るなんて聞いてねーよ！

龍之介 ああー！そーおでした先生！弟がいつもお世話になってます。

新美 いーえ。とおーーっってもいい子ですよ。玲央くん。

玲央 くームカつく。

龍之介

いやいや。こいつ、ずっとサッカーしか頭になかったから、遅刻ばっかして、授業もまともに聞いてないでしょ。でも最近いつちよまえに本なんか読むようになって。変わったなって。なので先生には感謝してます。

新美 いやーそれほどのことはしてますよ。

龍之介 多分、好きな子でもできたからだと思ってるんですけどね。

玲央 おい！

新美 さすがお兄さん。よくわかりで。

玲央 何の話してんだよ！やめろよ！

2人、玲央をみて、互いに顔を合わせ、にんまりとする。

玲央 なんだよ。

新美 それで、結城くんは、探したい本があるんでしょう？探さないの？

龍之介 あ、はい。ありがとうございます。

龍之介、本棚の方に消える。

新美 さてなるほど。今日は火曜日だから玲央と土屋さんねーじゃあーよろしくー。

新美、出て行く。

玲央 くそやろーども。

美鈴 好きな人いるんだ。

玲央 え！

美鈴 誰が好きなの。

ちげーよあいつらが勝手に言ってるだけだから。別に好きな奴なんていねーし。

賢治 紫 賢治

あの、篠原さん。  
……。  
篠原さん。

美鈴 紫 美鈴 紫 美鈴 紫 美鈴 紫 美鈴 紫 美鈴 紫 美鈴 紫 美鈴 紫 美鈴 紫 美鈴 紫 美鈴 紫

9 日木曜日。紫と賢治。本を探している龍之介。  
うーん……。  
え？  
本当だったら、どうするの？  
いや、そんなつもりじゃないのかもしれないし、私の勘違いかもしれないけど。  
本当だったら？  
ええ。  
あとね、昨日。試合見に来ないかって誘われた。  
そうなの？  
他の人としやべってる時より、テンション高いなーと思って。  
ん、何？  
あ、のさ。ゆっか。  
何見てるの？  
玲央って、私のこと好きなのかな？  
なんで。  
そうなの？  
あ、とね、昨日。試合見に来ないかって誘われた。  
へえ。

玲央 美鈴 玲央 美鈴 玲央 美鈴 玲央 美鈴 玲央 美鈴 玲央 美鈴 玲央 美鈴 玲央 美鈴 玲央 美鈴 玲央 美鈴 玲央 美鈴

8 日水曜日。美鈴と紫。グラウンドを見ている美鈴。本を探している龍之介。  
なんだ。つまらないの。  
え。  
そうだ。昨日試合だったんでしょ。どうだったの。  
え、おう。勝ったよ。  
すごいじゃん。  
いやまだ2回戦だし。  
よーだね。  
こんなところで負けられねーよ。今年は絶対全国行くんだから。  
がんばって。  
おう、試合見に来いよ。  
え、なんで。  
いや、別に！なんとなく。  
次試合いつなの？  
日曜？  
12日？いいよ。  
マジで？  
うん。何時にどこ？LINE教えて。  
おう！

紫 ん、何。  
賢治 篠原さんて、映画とか好き？  
紫 え、うん。好きだよ。  
賢治 !

賢治 俺も！大好きです！  
紫 え。  
賢治 あーいや！全然。いや、好きだけど！そうじゃなくて！はい！はい！  
紫 あ、はは。うん。そっか。

賢治 あの、篠原さん。  
紫 なに？  
賢治 日曜日、一緒に映画観に行きませんか？

紫 うん。いいよ。  
賢治 ほんとに！？  
紫 うん。何時にどこ？あ、LINE教えて。  
賢治 うん！

10日金曜日。賢治と治。本を探している龍之介。

賢治 キタ！マジでキター！  
治 そっちは西だよ。  
賢治 そうじゃなくて。キタんだよ。  
治 なにが来たの。  
賢治 あのな、篠原さんと、デートすることになった！  
治 やったじゃん。  
賢治 そうなんだよやったんだよキタんだよー！  
治 いいなあ。  
賢治 え？  
治 いや、なんでもない。  
賢治 もしかしてお前……。  
治 いや、違うよ別に俺は……。  
賢治 篠原さんのこと好きなのか！？  
賢治 篠原さんは誰にも渡さん！  
治 いや違うから。  
賢治 篠原さんは俺のもんだ！  
治 ばーーーーーか。

11日土曜日。治と新美と、ときどき二葉。

新美 きゃーーーーーー！！！！！！  
二葉 先生！？  
治 どうしたんですか！？  
新美 そこ、そこ！

新美の指差す先には、虫がいる。

治 え、虫ですか？  
新美 とつて、とつて！

治、とつて、窓から放り出し、窓を閉める。

二葉 春ですね。  
新美 ありがとうございます。  
治 先生、虫だめなんですか。  
新美 もう春って大っ嫌い。誰窓開けてたの！  
治 さあ……？  
新美 今度から開けないようにしといてー。お願い。

扉が開き、龍之介が入ってくる。

新美 あら、いらつしやい。今日も来たの？  
龍之介 はい。本、見つからなくて。

龍之介 え？  
龍之介 二葉ちゃんだよ、一葉の、妹の。

二葉の家の前。二葉と龍之介。

龍之介 一葉の誕生日、4月1日。驚かせてお祝いしようと思ってさ、31日の夜から電話してて、12時回ってから、「別れよう」って言ったんだ。  
二葉 え！？

二葉 別れようっていったんですか！？  
龍之介 いやだから、エイプリルフールで。  
二葉 ああ。  
龍之介 そうしたら、一葉泣き出しちゃって。そろそろかなーと思って、嘘だって言ったんだよ。そしたら一葉、めちやくちや怒って。電話切られて、何回かけても出してくれなくて。

二葉 はい。

龍之介 俺家の前にいたんだよ。驚かせてすぐ会っておめでどうって直接言えるように。

二葉 そうだったんですか。

龍之介 でもいくらエイプリルフルだからって、別れようだなんてダメだったよな。うーん、私もたぶん、やつぱり怒っちゃうと思う。

二葉 そっか。

龍之介 いや、でもそれは、龍之介さんが驚かせようって思ってたことくらい知らなかったからで、ちゃんと本当のことを知ってたら、また少しは違うのかなー、と思います。

二葉 そっか。

龍之介 わからないですけど。

二葉 だからやつぱり、一葉がどう思っていたのかだけでも知りたいんだ。

龍之介 あの言葉ですよね？

二葉 ン。

龍之介 お姉ちゃんの。

二葉 本は思想。その人の好きな本を読むことは、その人の思想や価値観を読むことになる。

龍之介 ああ。

二葉 この間、玲央くんが言ってるびっくりしたんです。

龍之介 あいつに言われたの？

二葉 いや、別の子が言われてたんですけど。龍之介さんが教えたんですね。

龍之介 あいつまた偉そうに。

二葉 だから龍之介さん、お姉ちゃんの好きな本を探してるんですね。

龍之介 ああ。一葉とつきあってた頃、一葉が何回も借りて読んでた本があったんだ。でも、タイトルがどうしても思い出せなくて。わかる？

二葉 ごめんなさい、私もわからないです。そうか。

龍之介 でも図書室のどこかにあるんですよ。お姉ちゃんの名前がたくさんある本が。

龍之介 たぶん。

二葉 龍之介さん。探しましょう。お姉ちゃんの気持ち。お姉ちゃんが龍之介さんの

ことどう思ってたか、見つけましょう。

陰っていく。



12日曜日。駅前。玲央、美鈴を待っている。美鈴、走ってくる。

美鈴  
玲央  
ごめん。遅くなっちゃった。  
おう、大丈夫だよ。

玲央  
美鈴  
玲央  
美鈴  
玲央  
美鈴  
玲央  
美鈴  
なんか、かわいいじゃん。  
そう？  
おう。  
ありがとう。  
行くか。  
あ、うん。

2人が行こうとすると、賢治が通りかかる。

賢治  
玲央  
賢治  
美鈴  
賢治  
美鈴  
賢治  
美鈴  
賢治  
美鈴  
あれ、土屋？おう、玲央じゃん。どうしたの2人で。お前らもデート？  
違うよ。たまたま会っただけ。俺これから試合だから。  
へえ、そうなんだ。  
賢治はどうしたの？  
あ、今から篠原さんとデートなんだ。  
そうなんだ！よかったね。  
おう！土屋が当番代わってくれたお陰で、話とかできるようになったからさ。  
ホント感謝してるよ。  
おめでとう。がんばってね。  
おう！あ、行かないと時間が。じゃあね。  
うん、じゃあね。

賢治いつてしまう。

美鈴  
玲央  
美鈴  
玲央  
美鈴  
玲央  
美鈴  
玲央  
美鈴  
よかった……。  
土屋……。  
でもよかったあー。すごいよかったあー！  
……本当にそう思ってるのかよ。  
思ってるよ。思ってる……。  
我慢すんなよ。  
ありがとう。  
さ！もうおしまい！行こう！  
おう。

美鈴

とにかくよかった！あー賢治とゆつか！うまくいきますように！

玲央

そうだよ！おまえも次だよ次！忘れて他の人好きになればいいよ！

美鈴

え。

玲央

大体あいつそんないい男じゃないじゃん。自己中だし、調子いいくせにヘタレだし、他にもっといい奴いっぱい……。

美鈴が、玲央の頬を叩いた。駆けていく美鈴。

13日月曜日。二葉と玲央。

二葉

そりや怒るよ。自分の好きな人を馬鹿にされたんだから。

玲央

いやでも、おしまいって言ったんだよあいつ。

二葉

おしまいって言うてすぐ切り換えるわけじゃないでしょ。たとえ諦めたとしても、好きなものは好きでしょう！

玲央

そっか。

龍之介

おまえな。恋愛で大事なのは、好きなものを知ることより、嫌いなことを知ることだ。好きなものは放っておいても好きなんだよ。でも、もし嫌いなことをされたらそれだけで関係が崩れちゃう時だつてある。だから相手が嫌なことを知って、それをしないようにすることが大切なんだ。

玲央

そっか……。

龍之介

ま、俺も、失って、初めて気づいたんだけどな……。

龍之介、二葉と目を合わせる。

14日火曜日。本を探している二葉と龍之介。賢治。

美鈴

え！？賢治？

賢治

おう。

美鈴

なんで。あいつは？

賢治

あーなんか用事できたから代わってって言われてさ。

美鈴

は？

賢治

あ、そうだ、あいつからお前に……。

美鈴、図書室から駆けて出て行く。

龍之介

あいつからなんだって？

賢治

ごめんって……。

龍之介

あんのバカ。

玲央、部活に行こうとしていると、美鈴が駆けてくる。

美鈴

ちよつと！なんで賢治と代わったのよ！

玲央 お前やつぱり賢治のこと好きなんだろう。だから一緒に……。  
美鈴 誰がそんなこと頼んだのよ！私そんなこと言っちゃダメ！賢治はゆっかが好き

玲央 余計なことって、俺はお前のために……。

美鈴 だからなにがあたしのためなのよ！

玲央 お前と同じことしたんだよ。  
美鈴 は？

玲央 お前が、自分の気持ち抑えて好きな人の、賢治の応援してるから。すげえな  
美鈴 ってるって。俺もそうした方がいいのかなって思ってる。好きな奴が、好きな人と  
玲央 一緒にいたら、喜んでくれるかなって思ってる。

美鈴 お前好きなんだろう。賢治のこと。本当は一緒にいたいんだろ。だから苦しいん  
玲央 だろ。俺は、お前が泣いてんのなんかみたくねえ。

美鈴 ねえ、それどうい……。  
玲央 じゃ、俺は今日部活いくから。

玲央、通り過ぎていく。背中を追う美鈴。

15日水曜日。美鈴と紫。

美鈴 どうしたらいいんだろう。

紫 玲央くん？

美鈴 うん。

紫 聞かせて。詳しく。

美鈴 ごめん、それはできないの。

紫 それで相談されても……。

美鈴 そうだよ。

紫 でもさ、玲央くんは知らなかったわけでしょ？美鈴がなんで怒ったか。

美鈴 うーん。

紫 だからなんていうか、1回目は許してあげるべきじゃない？それで、なんで怒  
美鈴 ったかちゃんと話して。それで同じこともう1回されたら、本当に怒っていい  
紫 と思うけど。

美鈴 そっか。うん。

紫 私には今はこれくらいしか言えません。

美鈴 そういえばさ、日曜日、賢治と一緒に出かけたの？

紫 それ聞いてよ！映画見に行ったんだけど、見たのが「植物図鑑」でさー。私

美鈴 恋愛もの興味ないから途中で寝ちゃった。

紫 そうだったんだ……。

美鈴 もーどうしてよりによって恋愛ものだったんだろ。恋愛もの苦手なのに。

美鈴 あー……。

16 日木曜日。紫と賢治。本を探している龍之介と二葉。

龍之介 あった……？

二葉 ないです。

龍之介 こんだけ探しても見つからないってことは、きっともう古くなって捨てられち

二葉 やったのかもな。

龍之介 私、探します。絶対見つけますから。

龍之介 ありがとう。

賢治 あの、篠原さん。

紫 なに。

賢治 また来週、映画見に行きませんか？

紫 ごめん、来週は予定あるんだ。

賢治 そっか。

17 日金曜日。治と玲央。

玲央 なあ、本の返却ってどうすりやいいの？

治 普通に棚に戻せばいいじゃん。

玲央 いや、去年図書委員やったた部活の先輩がさ、借りてた本返すの忘れててずつと持ってたみたいで、返しといてって預かったんだけど。

治 ああ。いいんじゃない、そのまま戻しとけば。

玲央 あ、おっけー。

玲央 あのさ、お前新美先生のこと好きじゃん？

治 えっ！？なんで……。

玲央 でさ、先生のためになんかして、それで逆に怒らせちゃったとして、どうする？

治 別に俺は、先生のこと……。

玲央 好きだろ。みてるやわかるから。いいから答えろよ。

治 そんなの、決まってるだろ。

陰 っっていく。

18 日土曜日。図書室。本を探している二葉。いつも通りに治と新美。

治は、虫を見つけてこっそり退治する。

新美 あの、先生。今度、市立図書館と一緒に行きませんか？

治 えっ？

新美 その、なんていうか……この図書館だけ見ているだけじゃ、なんか、ダメだと思っ  
うんですよ。だから、外の、その、もっと、大きな図書館がどうなっている

新美  
治

のかなって。

……いいわよ。一緒に、行きましょう！

ほ、ホントにですか！やったあ…（無言で北を指差している）

二葉、目に留まった見慣れない本を取り出してみる。  
裏表紙をめくり貸し出しカードを確かめる。  
そこには、いくつも連ねられた姉の名前が。

あああああ！

？

あ、いや。なんでもないです。

二葉  
2人

陰っていく。

19 日日曜日。本屋の朝。

美鈴 おじさん、お店あけてきたよ。  
隆介 おお、ありがとう。

玲央が来る。

隆介 いらつしやいませ。

美鈴 あ。

玲央 土屋……あのさ。

美鈴 おじさん、準備しますね。

隆介 ああ、いいのかい。

玲央 おい、逃げんなよ。

美鈴 なにしに来たの？こんなとこまで。帰ってよ！

玲央 聞けよ！

隆介 ちよつと君。美鈴ちゃんも。何があつたか知らないけど、落ち着いて。ね。

玲央 ごめん。俺が悪かった。何が悪かったかちゃんとわかってないけど……でも俺  
が、おまえのこと怒らせるようなことしたんだよな。だからごめん。

玲央 今日、2時から試合だから。見に来て欲しい。失礼しました。

玲央、隆介にお辞儀をして去っていく。陰っていく。  
龍之介の家の前。二葉がいる。龍之介がくる。

二葉 ありました。

龍之介 ありがとう。

本を受け取る龍之介。貸し出しカードには、たかさんの愛おしい名前。  
本をひらく。その目線は、とても真剣で、とても愛おしい。

龍之介 「アインブラットの本」

二葉 それは、君に伝えたいたった一つの言葉を探す旅。

本屋。浮かない顔をしている美鈴。

隆介 美鈴ちゃん。

美鈴  
はい。

隆介  
何があったか知らないけど、あんなに真剣に謝ってて、許してあげないの？  
別に許すものにもないですから。

美鈴  
どうして。

隆介  
あいつなんてどうでもいいですから。

美鈴  
本当に？

隆介  
どうでもいい人だったら、何にも思わないんだよ？

美鈴  
え。

隆介  
怒ったり傷ついたりするのは、大事に思ってるからこそなんだよ。どうでもいい人となにかあったって別に気にしないんだ。美鈴ちゃんが今そんな風になっ  
てるってことは、少なくとも美鈴ちゃんにとって彼はどうでもいい人ではない  
んじゃないか？そして、言いたいことがあるうちは、言っていた方がいい。

美鈴  
おじさん。

隆介  
僕はさ、早くに妻と娘を亡くして、ああ、もつと色々しとけばよかったなあとか、あれもこれもあったかかったなあとか、なんでしてあげられなかったんだろうなあとか、今でも色々思うんだよね。

美鈴  
でも、今は仕事ですから。

隆介  
仕事なんかより大切なことはたくさんある。

美鈴  
おじさん。

隆介  
さ、はやく。いっておいで。

美鈴  
ありがとうございます。

走り出す美鈴。見送る隆介。

サッカーグラウンド。美鈴が走ってくる。玲央の姿を探すが見つからない。

ふと、雨が降り出して来た。傘を持っていない美鈴。

すると、大学生らしき人が傘を持って来る。

千帆  
入る？

美鈴  
え？

千帆  
濡れたら風邪引いちゃうよ。ほら、おいで。

美鈴  
あ、ありがとうございます。

美鈴、遠慮がちに傘に半分はいる。

美鈴  
あの、横南の試合って、もう終わっちゃいました？

千帆  
もう終わったよ。今そこでミーティングしてる。

美鈴  
そうですか。

千帆  
あ、私元マネージャーなんだけど。横南の生徒？

美鈴  
あ、はい。

千帆

美鈴

千帆

美鈴

千帆

美鈴

千帆

美鈴

千帆

美鈴

千帆

美鈴

千帆

美鈴

誰の彼女？

え、そんな！違います！

なんだまだか。誰？

え、いや、あの、その……玲央です。

玲央くんか！たまに不真面目だし、よく空回りして失敗すること多いけど、それでも根はいい子だし、いつもまっすぐ一生懸命な子かな。

そうですか。

あ、ミーティング終わつたみたい。ほら、来たよ。

ありがとうございます。

あ、玲央くんも傘もつてないのか。まったく。はい。この傘あげる。

え、いいですよ、そんな。

大丈夫。私は……。あ。入れてもらえる傘ちゃんがあるから。

でも。

じゃ、がんばって。

千帆、傘を抜けて誰かのもとへ駆けていく。入れ違いで、玲央がくる。

玲央

美鈴

玲央

美鈴

玲央

来たんだ。

うん。試合、間に合わなかったけど。

いや、いいよ。おまえ、千帆先輩と知り合いなの？

ううん。さつき知った。元マネージャー。

おう。

美鈴

玲央

美鈴

玲央

美鈴

玲央

あの。

なに。

入りなよ。濡れちゃうし。

おう。ありがとう。

あのね、言いたいことがあるの。

おう。

玲央、美鈴の傘に入る。距離が近い。ふたり、歩き出す。陰っていく。

二葉

愛し合っていた男女が、ほんの些細なすれ違いから互いにいがみ合い、引き裂かれてしまう。けれど2人は、どうしても互いのことを忘れられずに、そして別れの前のささいないざごぎを収めきれずに、もう一度互いに会うため、それぞれ愛する人を探す旅にでる。そして、その旅の途中で、自分を省みることに、相手を許すこと、相手の言葉の中にある心を探ること。そして、再び巡り会ったときに、どんな言葉を伝えたいかを見つけていく。――お姉ちゃんが一番好きで、何度も借りて何度も読んだ本はかいつまむとそんな話だった。

そっとページをめくる龍之介。



龍之介

一葉……。

涙をこらえる龍之介。物語もクライマックスにさしかかる手前の一節に目を奪われる。

龍之介

「明日こそは、彼に会えるかもしれない。もし明日彼に会えたなら、聞いてもらいたいことがたくさんある。楽しかったこと、驚いたこと、危なかったこと、辛く険しいこの旅の話すべてを聞いてほしい。けれどその前に、まずはごめんねと言おう。ごめんねと言って、そのあとに大好きと言って、一度くっついたら二度と離れない磁石のように抱きしめたい。抱きしめたまま大好きと何度も繰り返し、抱きしめたままおいしいご飯を食べて、抱きしめたまま眠りについて、それから――」

先を読み進めることなく、涙を流している龍之介。

龍之介

ごめん、ごめんな一葉……。

龍之介を優しくだきしめる二葉。ふと、二葉の中に誰かがおりてくる。

二葉

うん、いいよ。私もごめんね。

みんながそれぞれ、誰かに伝えたい一つの言葉を見つけていく。

紫

賢治くんこの間はごめんなさい。私、映画見るのは好きなんですけど、恋愛ものは苦手なんだ。

賢治

こちらこそごめんなさい。篠原さんが恋愛もの苦手だって知らなくて。今度は、篠原さんが好きな映画を見に行きませんか？

治

先生ごめんなさい。この前窓開けてたの俺なんです。

新美

いいのよ全然気にしてないから。私も怒ったりしてごめんなさいね。

美鈴

ごめんね。

玲央

俺も、ごめん。

二葉の家の前。龍之介に送られて、二葉も来る。

二葉

よかったですね。仲直りできて。

龍之介

ああ。ありがとう。よかった。本当に。

二葉

私、2人に憧れてました。ずっとお姉ちゃんみたいになりたかったし、お姉ち

龍之介  
やんみたいになったら、龍之介さんみたいな素敵な彼氏ができるのかなって思  
ってました。

龍之介  
そっか。

二葉  
龍之介さん。また、会ってくれますか？

龍之介  
ああ、また会おう。

二葉  
はい。

龍之介、歩き出す。その背中を見つめながら、二葉に、再び想いがおりてくる。

二葉

龍ちゃん、私は、最後に龍ちゃんに逢いたいと願いました。ごめんねって言い  
たかった。大好きだよって言いたかった。……やっと言えたよ。本は思想。思  
想はその人。私は、二葉の中に確かに生きてるわ。龍ちゃん。これから、龍ち  
ゃんの中にも生き続けたいな。いつでも龍ちゃんのそばにいたいな。だから龍  
ちゃんは、笑っていてね。龍ちゃんの笑っている顔が、一番素敵だから。龍ち  
ゃん。ありがとう。だいすきだったよ——。

意識の中から、一葉が、すぐそこにいる感じがした。  
幕。